

土木工学・建築学委員会都市・地域デザインの多様なアプローチ分科会
第25期・第11回 議事要旨

日時：令和4年8月9日（金）15：00～17：00

会場：遠隔会議

出席者 佐々木 葉・伊藤 香織・小野 悠・神吉 紀世子・田井 明・竹内 徹・古谷 誠
章・増田 聡・南 一誠・三輪 律江・村上 暁信・山本 佳世子（18名中12名出席）

参考人 上平 崇仁氏（専修大学）

議題および決定事項

1) 上平氏に『『コ・デザイン』が問いかけるもの－Design with の多元性』というテーマで、以下のような内容について話題提供いただいた。

・デザイン概念は近代の産物であり、大量生産を前提とする複製性や用意周到な付加価値がつきまとう

・コ・デザインとは、デザイナーや専門家などの限られた人々によってだけでなく、実際の利用者や利害関係者たちと積極的にかかわりあいながらデザインを進めていこうとする取り組み・考え方である

・パブリックマインドを育むためには、近くて遠い立場の人を、三人称ではなくお互いに“*You*”にする機会、すなわち、協働する機会を持つことが近道ではないか

・何でも協働すればよいというわけではなく、長期間関わり使い手が学びながら変化していくもの、さまざまなステークホルダーが存在するものなど、協働することと相性のよい題材がある

・参加者に「意思決定」をまるごと委ねるわけではなく、だれが「決めるか」には段階がある

その後、出席委員と議論し、以下のような意見が挙げられた。

佐々木委員：デザインの概念についてどのような経緯で今の理解に辿り着いたのか。

上平氏：デザインについては手法の議論が多いが、哲学や目的を論じる人がいない。そこに応えたいという想いでやってきた。

小野委員：アフリカ都市ではセルフ・ビルドによるユニークな市街地が広がっているが、どこを残すべきで、なにが問題なのか、またその判断は誰がどのように行うのか、線引きが難

しいと感じている。

上平氏：都市において人の活動と素材の距離感が近いということだろう。『建築家なしの建築』（バーナード・ルドフスキー）などの議論と通ずるところがある。私は距離感を近づけるために、身近にある素材を見直してものづくりする取り組みを行なっている。

佐々木委員：主体性を取り戻す行為、ということかと聞いていた。たとえば、小学校に持っていく雑巾、昔は作っていたが最近は買うのが一般的。与えられたものを買う、消費の対象になっている。身近なことに主体的に関わっていかないと、地球は救えないということか。

神吉委員：究極的にはもう一回農業やりましょう、という話ではないか。多くの農地が放棄され、国内の食糧生産が大きな課題になっている。あなたはもう一度土を耕せますか？ということを問われているのだと思う。

上平氏：北欧では労働者問題から参加型デザインが始まり、それがある程度達成されたのでより対等な取り組みとしてコ・デザインが注目されている。日本の参加型とは全く考え方が違う。

村上委員：身の回りに関心を持つことは必要条件だと思うが十分条件ではないのではないのか。人新世に関心を持つにはもうひとつ何かが必要ではないか。コミュニケーションのあり方であろうか。

上平氏：土に還るおむつで果樹を育てるドイツのプロジェクト、街の空きスペースで「小さな森」を育てるキッドなど、人間が積極的に関わっていくことを可能にする取り組みがある。

佐々木委員：土木をやっていると、ミクロなことを積み重ねていけば少しずつ意識が変わっていくという実感はあるが、一方で本当に大きな問題を変えることができるのかという疑問がある。マクロなことを変えるには制度設計も含めて一気にやっていく必要がある。

伊藤委員：ワークショップやるときに一部の人しか参加していないという問題。たとえば、公共施設を建てる際に目の前にいる”You”だけでいいのか、という問題意識を持っている。

上平氏：一部の人しかいないということ認識するということだと思う。また、最初にすべて決め打ちでつくってしまうのではなく、運用しながらサービスを決めていくなど、時間軸を持たせることが重要。

古谷委員：「皆で遠くに行く」時の「皆」とは誰か？誰でも自由に仲間に入れる？もしくは「design with people」の people は来る者は拒まずということか？

上平氏：“You”という時に排他的になるというのはよく指摘される問題。取りこぼされる人をどうするかというのは考えていかないといけない。

2) 今後の予定について

今後シンポジウムを開催して、書籍など一般に発信できる形でまとめていく。